

# Fate/Prototype 蒼銀のフラグメント

文：桜井光 イラスト：中原  
原作：TYPE-MOON

第3巻 Beautiful Mind ACT-2  
期間限定試し読み PDF

## 現在までに判明している 1991年聖杯戦争タイムライン

各巻に描かれているエピソードを時系列順に再構築してプレイバック！ 複数の巻にまたがり描かれているものは初出の巻数を参照した。

【エピソード収録巻数】  
1巻 2巻 3巻

### アサシン召喚

アサシンのマスター死亡

バーサーカー、玲瓏館への偵察を始める

### バーサーカー陣営

異はバーサーカーから、聖杯戦争の概要と、彼の「正義の味方でありたい」という願いを聞かされる。自身もまた人々の平穏を守りたいと感じた異は、バーサーカーの手を取り、とともに聖杯戦争を止めることを誓う。



バーサーカー 来野異  
知的で穏やかな「ジキル」と狂獣「ハイド」の人物と存在を有している英霊。

### アサシン、愛歌と邂逅

マスターが忠絶えてからも、アサシンは自分に触れても微笑んでくれる「誰か」を求めて夜の街をさまよっていた。そんなアサシンの前に現われた愛歌は彼女の目にこともなげに落ちて……。



アサシン  
「静謐のハサン」の異名をもつ薄皮の名字。必ず全てが毒で、その口付けは英霊をも殺す。

### キャスター陣営

父のサーヴァントであるキャスターに「友だちになりましょう」と言われた美沙夜。彼と言葉を交わすうちに、美沙夜は彼を信頼するようになる。美沙夜に対するキャスターの態度もまた、程やかなものに見えたが……。



キャスター 玲瓏館美沙夜  
神秘的な英霊。真名は歴史に名を残す伝説的な錬金術士・パラケルスス。

ライダー、独断でキャスター陣営と同盟を結ぶ

愛歌、キャスターに接触し「お友達」になる

### 玲瓏館にて戦闘②

セイバー・ランサー・アーチャー・ライダー vs バーサーカー 消滅

### 晴海埠頭にて戦闘

セイバー vs スフィンクス(ライダーの宝具)

### セイバー陣営

沙条愛歌は、自身が呼び出したサーヴァントに恋をしていた。彼女は料理を振る舞いながら、7人7騎の殺し合いを「お料理と同じだ」と語る。少女にとっては、どちらも愛しい彼との日々の彩りのひとつに過ぎない。



沙条愛歌 セイバー  
少女の愛をした方。セイバーの願いを叶えるために、聖杯戦争を始める。

### 池袋にて戦闘

愛歌の提案で、彼女と離れて深夜の暗戒活動を行っていたセイバーは、池袋にて大槍を持った女性・ランサーと交戦する。数回交戦を交わしたのち、彼女は謎の液体を飲み込み姿を消してしまっただけに、聖杯戦争を始める。



ランサー

セイバー vs ランサー

引き分け

### ライダー召喚

奥多摩に本拠地を構える伊勢三家の当主・玄莉は、零落した家系の復興のために聖杯戦争へと挑んだ。しかし、召喚の触媒にライダーの亡き妻の遺品を使ったことで彼の怒りを買ってしまっただけに、聖杯戦争を始める。



ライダー  
徹底不遇な態度と圧倒的なまでの力を誇る。その正体は古代エジプトの最高の神王。

### ライダー、伊勢三少年と邂逅

玄莉のマスターたる資格を見極めるために工房を探索していたライダーは、無数の医療機器に繋がれた瀕死の少年と出会う。彼に願いを問うたライダーは、その答えにかつての最愛の友の面影を見出し……。



伊勢三少年(99年)

### 玲瓏館にて戦闘①

セイバー vs バーサーカー 引き分け

### 杉並にて戦闘

自分の命を狙うアサシンに対し「きみを殺したくない」と告げた異。その言葉は、アサシンの中に奇妙なしこりを残していた。

来野異 vs アサシン 来野異 死亡

### ライダー、東京湾上に神殿を召喚する

### 奥多摩にて戦闘

愛歌・アサシン vs 伊勢三 伊勢三玄莉 死亡

### 愛歌、玲瓏館の当主に接触 美沙夜に呪いが残される

玲瓏館の当主 死亡

To be Continued...

一九九一年、二月某日正午。  
東京都新宿区――

JR新宿駅東口付近。俗に言うところのアルタ前。

駅を出た直後の右手側に交番を見掛けた時には冷や汗を掻いたものの、來野きたの翼たつみの心配は  
どうやら杞憂きゆうで終わってくれそうだった。新宿という場所のせいなのか、正午という時間  
のせいなのか、真正銘の平日であるにも拘かわらず東口の周辺は多くの人で溢あふれている。

新宿の人混み。基本的には二十歳前後の男女が多いように見えるけれど、正直、他人の  
年頃を当てるのがどうにも異には苦手だった。昨夜だって、新しい友人の年齢をかなり間  
違えた。とは言え、大学生だろうか、自分と同じくらいの年齢好の男性も多い。

これなら、自分と彼――新しい友人の姿も目立つまい。

すわりとして清涼な印象のある外国人の彼は、整った顔立ちで、もしも教室に連れて行  
きでもしたら女子生徒の黄色い歓声が飛び交うことは間違いないものの、落ち着いた風貌ふうぼう  
の彼は、どういう理由か、人混みの中によく馴染なじむというか。

其処そこにいるのが自然に見える。

巨大なアルタビジョンをふと見上げて、へえ、と静かに頷うなずきながら歩く彼。



確かに。馴染なじんでいる。

それでも、整った容貌に、穏やかで優しいみどりな翠色の瞳ひとみ。

彼に一度でも気付いてしまえば、目は留まる。ほら、今も、横を通りすがった若い女性たちが「予定がなければいつまでも見つめているのに」といったような表情を浮かべながら、残念そうに西新宿方面、手書きの映画看板が壁面にずらりと連ねられたJ R線路脇の小道へと歩いて行く。

「頭は理解しているつもりでも、やはり驚いてしまうね」

おっと。彼が何か言っている。

女性たちをぼんやり視線で追うのを止めて、異は彼へと向き直る。

「ああ、うん。そうだな。外人さんって、やっぱり目を引くっていうか」

「この画面のことさ」

「あっ」

これはいけない。

完全に、変なやり取りになった。

人の話は平静な気持ちで聞きなさい、と母方の祖母からよく言われていたのに。

「そうだよな、お前の時代には街頭ビジョンなんてなかったろうし。テレビ、まだなかったら？……あれ、でも、現代の知識は一通り備わってるんじゃないか」

「言ったらう、理解しているつもりでも、って」  
「あ。ごめん」

またやってしまった。  
すっかり抜けていた。

自分の悪い癖を呪いつつ、巽は頭を下げる。

「気にしないでいいよ、巽。分かり難い感覚なのは確かだ」

「悪い、ほんと。…それで、えっと、どうかな。新宿。お前の言ってた通り、人のいっばいいる場所に来てみたけど」

「うん。いいものを見られた。外観こそ変わるものはあっても、人は変わらないね」

「んー？」

何を言ってるのか——

自分と同年代か、せいぜい二十歳前後にしか見えないというのに。

この新しい友人は、実に、変わった物言いをする。

けれど、それも当然ではあるのだろう。

何故なら、彼は。

「連れてきてくれてありがとう、マスター」

彼は、人間ではなく。

現代を生きる者ではなく。

この、来野巽によって召喚された——サーヴァントであるのだから。



Fate/Prototype

蒼銀のフラグメンツ

『Beautiful Mind』



サーヴァントの知識について。

先述した通り、聖杯戦争が如何なるものか、召喚された瞬間から英霊には一通りの前提知識が聖杯によって自動的に付与されている。

自身が魔術師<sup>マスタ</sup>によって現界しているという事実。  
七騎の英霊と七人の魔術師。三画の令呪。  
最後の一騎と一人となって聖杯を手に入れば、自らの願いが叶う<sup>かな</sup>ということも。

本来の在り方とは異なり、性能<sup>パフォーマ</sup>と能力<sup>スキル</sup>、そして階梯<sup>クラス</sup>とで構成される魔術的存在として召喚されていることも。その他、英霊同士は独特の気配を感じ合うという性質さえも――

自らがその一部となる聖杯戦争の仕組みを、彼らは理解している。  
万が一にもマスターの側に何らかの問題があり、前提知識<sup>ほんん</sup>の殆どを、或いはすべてを得ていない状態で偶然にも令呪を得て英霊を召喚した、といった場合であっても、サーヴァントは正しく状況を理解し、己<sup>おの</sup>が主人へと聖杯戦争の何たるかを語り得るだろう。

一方で――

英霊たちは、現代<sup>い、い</sup>に対する知識<sup>ち、い</sup>も聖杯によって与えられる。  
聖杯戦争の開かれる東京に於ける言語や一般的な知識を自動的に付与されるのだ。

故に魔術師の側は、異境の英雄の母語を調査・学習する必要はない。  
同時翻訳を可能とする魔術を行使することもない。  
修得難度が比較的高いとされる日本語を、サーヴァントは母語のように操る。

監督役の語る所では、是<sup>これ</sup>は、聖杯戦争を円滑に進めるための効果であるという。

是により、現代の様相を目にしても、耳にしても、英霊たちは自分たちの生前と比して混乱することもなく目的のために戦い続けるのである。

だが、心せよ。

既に「知り得た」状態ではあっても、それは経験<sup>けいけん</sup>ではない。

現代の何かしらに対してサーヴァントが強く興味を抱く可能性は十二分に有り得る。

自らの英霊の性質をよく理解せよ。

決して、彼らの意識を聖杯戦争から引き離してはならない。

(古びた二冊のノートより抜粋)



來野巽は平凡な青年だった。

少年から青年へと差し掛かった頃合いの、世田谷の都立高校に通う高校二年生。

成績は中の中。

運動も中の中。

気になる女子は、三日に一度は笑いかけてくれる隣席のクラスメイト。

趣味は野鳥観察と、読書。

そう、成績には反映されないまでも、本はそれなりに読んでいるという自負はあった。

とは言え、世界の真実なんてものは知りようがなかった。

何もかもが平凡だった。

取り立てて何かが優秀ということもなく。

せいぜい、双眼鏡や一眼レフカメラのファインダーの向こうに捉えた動物が、何故だか

妙に長く動きを止めることが偶然にも多く、動物観察や撮影が得意だった程度。

けれど、一九九一年二月某日。

こうして彼と新宿を歩いている瞬間から数えて、二日前のこと――

平凡でないことをした。

と言うか、見付けてしまったのだ。

全国共通模試の結果が記されたプリントアウトで偏差値が丁度中間あたりなのを見たこともあって、自分はさほど特別な人間ではなさそうだと自覚した矢先のこと。昨年末に亡くなった母方の祖父の遺品、形見分けの品が実家から送られてきて。

そう、唯一、クラスメイトたちと異なる点があるとすれば、巽は世田谷の小さなアパートで春から一人暮らしをしていたぐらい。バブル崩壊の煽りだか何だかで地方に転勤が決まった父に母と妹は付いて行って、受験を控えた自分だけが都内に残る形。

送られた品々に特別な何かを期待することもなかった。

日本史の教科書に名前があるような偉人の子孫である証拠とか、とんでもない額になりそうな美術品とか、そんなものがあるとは予想もしない。今ではすっかり卒業してしまった漫画やアニメに耽っていた数年前であつたら、神話や伝説にあるような剣や宝石のよなもの自分が受け継がれて、めぐるめく冒険の日々が始まるきっかけとなる――なんてことを夢想したかも知れないけれど。

古い写真。古い本。インクの切れた古い万年筆や、第二次世界大戦に従軍していた頃のことか記してある手帳のようなもの。祖父の遺してくれたささやかな品々を、ひとつひとつ、思い出と共に噛みしめながら確かめていって。

「何だ、これ？」

過酷な戦争の日々が淡々と綴られた手帳とは別の、黒い手帳。

そこには奇妙な文字の羅列があった。

何かの呪文のような、と思ってしまうのはオカルトチックな本を幾つか好んで読んでいたせいだろうか。それとも、今にして思えばこの身に備わった遺伝的形質のせいか。兎も角も異はその長い文章を読み上げた。

魔法陣もないのに。

言葉は確かに、魔術としての機能を果たしたのだった。

光を見た。電灯のそれとも、炎のそれとも、月や星、太陽のそれとも違う、科学雑誌にあつた核技術特集で目にしたコヒーレント光を異は一瞬だけ思ったものの、青い光ではあつても異なる性質の光だというある種の確信があつて。

そして、彼が現れたのだ。

新しい友人。

年頃は自分よりも些か上であるように見える、外国人の男性。目の色が綺麗だった。

アパートの玄関を開けてやって来たのとは違う。六畳間の上に浮かんで幾何学的な模様を描き出す光——擬似的な魔法陣だろうとは彼から後で知らされた——から、まるで、沸き上がるように。青い光の粒子を纏うようにして、実体化したのだ。

直後の異の反応は平凡なものではあつて、特筆すべきこともない。

一応、語っておくと——

驚愕の果てに悲鳴を上げた。静かに、と彼のジェスチャアを見て何とか落ち着いていた。

どう対処すべきかを迷った。大丈夫、と彼が口にする言葉を真正直に信用してみた。

これは来客なのかと考えた。少し待って、と彼へ告げつつ急須でお茶を淹れてみた。

魔術を知らず、神秘を知らず、暴虐を知らず、死地を知らず、平穩の中でのみ育つた異にとつては精一杯の反応ではあつたのかも知れない。結果的に、突然の闖入者を前にして対話 という行為を選んだことは正解のひとつではあつたのだろう。

「それで、ええと」

ひとしきり——

異が口にした呪文と祖父の遺品の何かを触媒にして、本来であれば有り得ないような超常の事象が起きたこと。その事象によつて彼がこの世田谷区の片隅の小さなアパートへ姿を見せたこと。彼の名前。

等々を卓袱台越しの彼の口から聞かされた異は、二杯目の熱いお茶を喉へ流し込んでから、努めて冷静に、祖母の言葉を思い出しつつ切り出した。

「バーサーカー？ ジキル？ ハイド？ お前のことはどう呼べばいいんだ？」

「バーサーカー。そう呼んでくれて構わない」



「そっか」  
けれども狂戦士という感じじゃない。

それが異の得た、闖入者である彼への印象だった。

確か、バーサーカーというのは北欧の古い戦士たちの異名のはずだ。成績には殆ど関係しない知識ばかりが羅列された本の類を読んで良かった。同じ単語を耳にしてもクラスメイトの何割が意味を取れるだろうか。

そういった点に関しては、自分はそう平凡でもないのかも知れない。

「真名は極力、口にはしてはいけない。何処に他の魔術師の耳があるのかは分からないからね、きみが望むと望まないと、僕の正体は隠しておくのがきみのためだ」

「そんなもんか」

「そうだね」

彼——バーサーカーは穏やかな青年に見えた。

外国人らしく、床に直接腰を下ろすのは少しやり難そうではあったものの、きちんとこちらが教えたように胡座を組んで畳の上に座って、異の目をまっすぐに見ながら言葉を返してくる。問えば、答えてくれる。

特殊な趣向を凝らした強盗のようなものではない筈、と異は確信していた。

見るからに金も物もないと分かる一人暮らしの高校生のアパートに押し掛けたりしても

何の利得もないだろうし、それに何よりも、彼の瞳。

嘘を言っているようには感じなかった。

祖父の遺品を引き合いに出されたからではなく、直感で、巽は昨年<sup>まなざ</sup>に逝去した祖父の澄んだ眼差しを思った。どこか似ている。何かの意図を以て相手<sup>もっ</sup>を誘導しようとしている言葉とは違う、ただ、自分の目にしてきた事柄だけを語る、静かな瞳だった。

「真名、か」

——真名ジキル。もしくは、反英雄ハイド。

バーサーカーは、自らの本当の名前としてその二つを巽へ告げていた。

流石に知っている。海外の、古い小説の主人公の名前だ。善人の学者が、特殊な薬で自分の中に秘められた「悪人」の部分を暴走させてしまっ、とか、そんな話だった。

学者の名がジキル。薬で出現する「悪人」の人格が名乗るものが、ハイド。

どちらも厳密には同一人物の名前。特殊な性質を持っている小説の登場人物ならではないものではあって、対して、現実の人間は二つの名前を普通は持たない。

それでも巽は彼が嘘を言っているとは思わない。

ならば、やはり？

「片方が本名で、もう片方は、本名にちなんで普段使いしてる偽名とか？」

「どちらも僕の真名だよ」

「そっか」

よく分からない。

ある種の平行線を描いているという気はしていた。

何か、決定的なものがこの会話には欠けている。

「お前、さ。バーサーカー。大切なことだからちゃんと答えて欲しいんだけど」

「何だい」

「……人間、だよな。お前？」

「違うよ」

「んっ」

なるほど。

それは確かに決定的なずれではあった、けれど。

「流石。いい目を持っているね、巽」

「うん？ 目？」

「きみの予感通り、僕は人間ではない。きみと共に聖杯を目指すサーヴァントだ」

そうして——

明確に理性を有して、語る彼の口から、巽は『聖杯戦争』の存在を知った。

万能の願望機、聖杯。  
神話の再現者、英霊。

神秘の行使者、魔術師。

世界に厳然として在る数多の神秘、知られざる魔術の世界を。

自分の“右目”が、ある種の魔術行使を可能とする“魔眼”であること。母方の一族は恐らくは魔術師の家系の末裔であり、口伝なりの継承がなかった以上は既にその過去はなかつたものとされているのだろうけれども、異自身は、その形質を隔世遺伝として偶然にも受け継いだのだろうということ。

そして、自分が、聖杯戦争の参加者たる魔術師のひとりとして選ばれたことを。

「聖杯戦争、か。そいつが東京で始まるんだな」

「そう、だとも。いや、もう既に始まつてる……とも言えるだろう」

「なるほどね」

正直なところ。

半分くらいしか理解できていない、という自覚はあった。

魔術の世界？ 聖杯？ 英霊？

魔術師？ 自分が？

理解どころか信じるにしてもかなりのエネルギーを必要とするような内容ばかり。

それでも、バーサーカーを名乗る彼の言葉はすべて、真剣に聞こう。

異はそう決めていた。出会つてからの僅かな時間で、ただ、それだけを決めた。

何もないところから人が現れるという超常の事象を目にしたから、ではない。そんなものは奇術の類でどうとでもなる気がする。

聞こうと決めた理由。それは――

彼の瞳が、やはり、似ていたからだろう。

最後に異が目にした、祖父の透き通った双眸と。



聖杯の絶大なる力を以て召喚される英霊は、英雄である。

少なくとも聖堂教会の人間はそう魔術協会へ語ったという。

是は一面では事実ではあるが、特殊な例外が存在している。

それが“反英雄”だ。

悪の性質を持ちながらも英雄と定義される者。

いわゆる“反英雄”とはそういった者たちだ。文字通りに聖なる杯であるという聖杯が、悪に類する者を召喚することは本来であれば有り得ない。善悪といった観念的なものをここで論じるつもりはない。が、少なくとも聖堂教会の語る“善き魂”が英霊であるならば是は矛盾ではある。

理由は幾つか考えられる。

本来の性質は正しく善でありながら、例外的に悪を内包する英霊——であるとか。善悪がやはり観念的なものであるならば、この説も些か苦しいだろう。

別の可能性を語るとすれば。

そも、聖杯は“善き魂”ばかりを導くものではないのだ、という仮説。であれば、正しき英雄の中に“反英雄”が混在していても道理ではあろう。

聖堂教会の人間はこの仮説を強く否定している。

彼らの言葉を借りるのであれば。

「聖杯はまっただき善である」と。

彼らは断言する。

故に、万が一にも“反英雄”が聖杯戦争に姿を見せたのであれば、前者の説こそが正しいに違いない。彼らはそのように我ら魔術師に語りはしたが——

彼らが彼らの奉ずる神にかけて誓う言葉は、彼らにとっては絶対である。であればこそ、ここは彼らを信ずる他にない。が。

妙な胸騒ぎが在る。

占星術なりで何かしらの予見を得た訳ではなく。ただ——  
言いようのない不安が、今、私の胸には在る。

(古びた一冊のノートより抜粋)



夜の新宿。京王百貨店屋上。

空が見たい、と小さく口にした彼を異はここへ連れてきた。

まだ東京にいた両親や幼い妹と一緒にこの場所へ来たのは子供の頃で、中学にも上がっていないかったように記憶している。そう、はっきりとした記憶だった。

夜が消えたかのような東京に暮らしていると不思議と夜空をあまり見上げなくなる、と語っていたのは確か母だったろうか。母の故郷にして祖父が住んでいた田舎は随分と緑深い山間の小さな集落に在って、夜ともなれば見渡す限りの星空が現れて、子供心にも「すごい」と思ったもので——そのせいか、空にほど近いこのデパート屋上に来た時、我知らずに幼い異は空を見上げたのだ。今も、こうして。

少ないながらも、星は在る。

祖父のいた田舎ほどではないまでも、美しく煌めいて。

「……冬の大三角は、どれだっけか」

白い息を吐きながら、呟く。

空へと向けていた視線を戻すと、ひどく懐かしい光景がそこには在った。デパートの屋上につきものの、小さな遊園地じみた遊戯施設——幼年向けの乗り物が幾つか並ぶ京王スカイプレイランド。午後五時を過ぎているから、もう営業は終了している。

人の姿は殆どない。

フェンス近くのベンチのひとつへ腰掛ける異とは裏腹に、彼、バーサーカーは涼やかな

瞳を星の少ない夜空へと向けていた。何を思っているのだろう。彼の故郷、というか、生前の彼が暮らしていたという英国首都ロンドンとは、見える星も違うのだろうか？ それとも、星の見え方が異なるのは北半球と南半球だったろうか？

「二日前。出会った夜にも言ったね」

「ん」

「僕は、確かに小説として語られる物語の登場人物ではある。正確には、そのモデルとなった人間だ。いいや、その人間が死後に英霊と化したものが、聖杯ときみによってサーヴァントのかたちとして導かれたものだ」

それは、確かに二日前の晩にも聞いた言葉だった。

あの時と同じ感慨を異は抱く。すなわち。

「ややこしいな……」

「すまない。でも、これが事実なんだ。生前は碩学たらんと客観をこそ心掛けていた僕だけど、今は、この上ない程に確かな客観的事実を有しているからね。人間ではなくサーヴァントであればこそ、僕はそう断言できるのさ」

「いいよ。信じる。お前はサーヴァントっていう存在で、人間じゃなくて、俺と一緒に聖杯戦争つてのをするために来たんだろ」

「ああ」

星空からこちらへと向き直りながら、彼が頷く。  
美男子だった。

小説で読んだジキル氏というのはもう少し年齢が上のような気がしたけれど、それを口にするに彼はこう答えた。必ずしも僕たちは死亡時点での姿で現界するばかりではないよ。うだね、と。どうにもそういうものらしい。

「僕は、前世紀……十九世紀の人間だ」

「もう聞いたぞ」

「そうだね。もう言った。だからこそ、この二十世紀を生きる人々を、街の姿を目にしてみたかったんだ。この一九九一年の東京がどんな社会、風俗であるのかは、聖杯から付与される知識で把握はしていたけれど」

「それも聞いた」

「ああ。そうだね。そして僕は今日、知った。人々は変わらないと。街もそうだ、多くの人々がその生を謳歌する場所に他ならない」

そう言っ、何故だかバーサーカーは微笑んだ。

柔らかく、優しい表情だった。

アルタ前だけではなくて、夜に至るまでの間じゅう絶えず振り返ったり囁き合ったりしていた通りすがりの女性たちがこの微笑を目にできたら、きっと喜んだろうに。こんな夜

中の殆ど誰もいないようなデパート屋上で、自分にだけ向けるのは勿体ないな、と巽はぼんやりと思考する。どうして笑ってみせるのか、この、時を超えて現れた——小説の主人公と同一人物であると名乗った新しい友人は。

「えっと、満足したってことか？ それならまあ俺も良かったよ。わざわざ平日に授業さぼって案内した甲斐があるってもんだし」

「感謝しているよ、巽」

「いや。あらたまって礼を言ってくれて意味じゃないぞ？」

「感謝しているのは本当なんだ。だから、言わせて欲しい」

妙に改まって、何だろう。

内心で首を傾げてから、実際にも首を傾げてみせる巽へとバーサーカーは言った。

語調を変えずに静かな印象のまま。けれど、何処かに僅か、熱意を——

否。きつと、決意を込めて。

「僕は今尚、悔やみ続けている。霊薬を用いての実験が導き出したものであったとしても、自らの裡に在った“悪”を止められなかった自分自身の人生を。命と引き替えに止めた時には、既に多くの犠牲を出していたという事実を」

真摯。真剣。

決して声を荒げたりしている訳ではないのに、叫びのように、切なげな言葉。

余計な口を挟める雰囲気ではなかった。

「だから、巽は黙って、彼の視線と言葉を受け止める。僕は無力なサーヴァントだ。宝具として現出する霊薬を用い、狂化——獸化と言ったほうが近いかな——つまり、反英雄ハイドとしての性質を顕さないことには一般的な人々と殆ど大差がない。英霊特有の気配を有さない代わり、一切の能力も発動せず、割り当てられた性能も発揮されない」

一旦、彼が言葉を切る。

それは昨晩に聞かされた話だった。

だから、現界したまま外を出歩いてまず敵に感知されることはない、と。

「僕は無力だ。暴走せずには力を発揮することも難しい。正体を探り合いながら死闘を繰り広げることになるだろう聖杯戦争に、僕という個は、きつと向いていないだろう。」

だとしても、僕は思ってしまう。僕がかつての人生を送った時間、場所と変わらずに人々が在るこの街ならばこそ、今なお胸に燦る無念を晴らしたい、と」

「……それ、今日、外に出掛けたらお前が言ったのと関係してるんだな」

やっと、巽は言葉を告げる。

意味を違えていませんようにと、僅かに何かへ願いながら。

すると、三つの名を持つ彼は——

「そう。聖杯戦争は、魔術師たちの性質によって暗闘として定められてはいるけれど、しかし英霊の力は甚大だ。荒ぶる神話、伝説の再現として振るわれる彼らの力は、きみのお祖父さんが目にした大戦のそれにも等しいかも知れない。激化すれば、東京は文字通りの戦場と化し、多くの人々が犠牲となるだろう。だから、僕は」

再度。彼は、微笑みながら。

瞳は真剣なまま、真摯なままで。

ただ、顔のかたちだけを優しげなものへと変えながら。

こう言ったのだ。

「今度こそ、初めから正義の味方で在りたい——と。」



過去、巽は正義の味方だったことがある。

変身したり巨大なロボットに乗り込んだりして、街を脅かし、多くの人々を恐怖に陥れようとする邪悪な怪人たちや組織を相手に、与えられた正義の力を以て立ち向かい、街と

人々の平和を守り続けた——他の、同年代の男子たちと同じように。

幼い頃の日々。

他愛なく世界を守っていた、過去。

たとえば、この京王スカイプレイランドで無邪気に遊んでいた頃だ。

小学校低学年の頃までは、そうだった。今はもう遠い過去の記憶ではあって、実感を伴って思い返すことはあまりない上に、そうしようとするとあまりに気恥ずかしいから取り立てて思い出そうとはしない。

でも。確かに、自分は正義の味方だった。

テレビで見た仮面を纏うヒーローたちと自分を同一視して、近所の友人を邪悪の怪人や組織の尖兵として。勿論、入れ替わりに自分が邪悪の側でヒーローに立ち代わったことも、同じぐらいの回数あった筈だ。幼いごっこ遊び。興味なげに、それなのに「お兄ちゃんと一緒にいい」とついて来る妹を主に人質役にしたりして、日が傾くまで世界を救い続けたり、世界を襲い続けたりした。

楽しかった？

よく覚えていない、というのが正しい。

異の中では幼い頃の他の記憶と一緒に、漠然と皆で遊んだ楽しい過去として納められていて、正義の味方にまつわるものだけを取り上げて楽しいとか、楽しくなかったとか、そう明確には整理されていない。

ただ、ひとつだけ。

気恥ずかしさを乗り越えて思い出される事柄が、ひとつ、あった。

「ねえ、お兄ちゃん」

そう——

妹が声を掛けてきた時のこと。

珍しく遠出をして遊んで、丸子川沿いに歩いて家へと帰る最中のこと。現在住んでいるアパートにごく近い場所にあった二階建ての一軒家へと、二人並んで手を繋いで。

同じ年頃の子に比べても小柄だった——今はすっかり背も伸びて、生意気にも「来年にはお兄ちゃんを超しているかも」なんて宣っている——妹は、大抵、異が遊びに向かう場

所にはついてきていて。

帰りは、必ず手を繋いで歩いた。

母からも父からもそうするように言われていたし、こちらが手を伸ばさなくても、妹は勝手にこちらの手を握ってきえていたから、自然とそうなった。

あの頃の妹はあまり沢山喋るほうではなかったから、帰り道も、大抵、何かを話すのは自分ばかりで、妹は「うん」と頷くばかり。故にこそ、あの時のことははっきりと今も覚えていいる。思い出せる。

「さつき、ノリくんが、わるものやったときね」

詳細は覚えていない。

ただ、確かに、同級生のノリミツと遊んだ後のはずだった。

ノリミツが悪役。東京を襲う邪悪の尖兵役。

対して巽が正義の味方。悪と戦う改造人間とか、そういうモノ役。

そして、妹は普段通り人質役で――

「ちょっと、こわかった」

何が妹にそう言わせたのかは分からない。遊んだ具体的な内容までは現在の巽は思い出せなくて、ただ、比較的演技派というか入れ込んでしまう性質のノリミツが悪役をやるの見事なまでに大声で悪そうに笑ったり、テレビの中の悪役さながらにあれこれと口上を述べるもので、近所の大人たちからはよく「うるさい」と注意されていた。

だから多分、怖かったのだ。妹は。

すっかり悪役気取りで振る舞うノリミツの言葉が。声が。

「ちょっとだけだよ」

そう言う妹の手は、僅かに。ほんの僅かに。

震えていて――

「でも、お兄ちゃんがいたから、こわくなかった」

なんだそりゃ。

怖かったんじゃないのかよ。

確か、自分はそんな風に言って、妹に笑ってみせたのだと思う。



「……正義の味方か」

京王百貨店の夜の屋上で、新しい友人の言葉をぼつりと反芻する。

來野翼は平凡な青年だった。

成績は中の中。

運動も中の中。

趣味は野鳥観察と、読書。

到底、世界の真実なんてものは知りようがなかった。

魔術を知らず、神秘を知らず、恐怖を知らなかった。

同年代の男子たちとまったく同じく、何とかいう昔の占星術師が「予言」したという一九九九年を八年後に控えながら、時たまに「予言が本当だったら」と話すことはあつても、それなりに忙しく、それなりに楽しみながら一九九一年を過ごしているだけで。

何もかもが平凡だった。

幼い頃に、友達を相手にごっこ遊びをしていた過去さえ思い出すこともなく。

けれど――

（東京が、戦場になる？）

聖杯戦争。

そういう名前のある種の魔術儀式であるとは聞いていて、戦争というからには命のやり取りをするものだろうかと臆気に認識してはいた、ものの。有り体に言えば実感は薄かった。他人はおろか自分自身の命が危機的状況に陥る、ということさえ具体的な感慨は浮かんでいなかった。突然言われても、そんなものは無理だ。

だからこそ、普段とそう変わらずにバーサーカーの話を書くことができたし、こうして新宿の街を案内することもできた。他人事、という言葉が一番近かったかも知れない。けれど。今。

東京が戦場になる、という旨の言葉を聞いて――

思うことがあった。

感じることも。

東京、という名前はこの国に於ける都市の名前だ。

紛うことなき首都。自分の暮らしている街。

父の転勤に際して異ひとり住み慣れた東京世田谷に留まることを選んだのは、勿論、最大の理由は受験のためではあつて、他に何かを意識したことはなかった。

そうだとしても。

思うことがあったのだ。  
感じたのだ。

「ああ、東京を、来野巽という人間は、自分の街だと認識していることを。  
東京。小学校や中学校からの付き合いである腐れ縁の悪友たちがいる、この街。  
東京。朝、ゴミ出しの時にいつも挨拶してくれる和やかな老人がいる、この街。  
東京。夜、学校帰りに立ち寄っては言葉を交わすコンビニ店員がいる、この街。  
東京。通学に使っている私鉄駅前でいつも忙しく行き交う人々のいる、この街。  
——三日に一度は笑いかけてくれる隣席のクラスメイト女子がいる、この、東京を。」

「正義の味方、か」

再度、我知らずに同じ言葉を呟いていた。

「滑稽だと笑ってくれても構わないよ、巽」

「笑うもんかよ」

短く返答した。

素っ気なく言った、心からの言葉だった。

「俺、魔術とか、そのへんのこととはさっぱりだ。この右目だって、お前に言われるまでそんな大したもんだとは思ってなかったし、ちゃんと使えるかどうかも分からない」

「僕が指導するよ。生前は魔術師ではなかったけれど、薬学の果てに錬金術の一端ぐら

には辿り着いていた。ある程度は、教えられることもある」

「それで勝てるのか？ 魔術師や英霊って、化け物じみてるんだろ」

「分からない」

「はは、何だよそれ。正直だなー」

軽く笑ってみせる。

きつとこれも、実感が薄いせいだ。

「笑わずなよな」

肩を竦めて、巽はまたも夜空を見上げる。

星は少ない。

遺品整理のために実家へ戻っているだろう母や妹も、多分、同じように空を見ているだろうという妙な確信があった。まだ忙しく地方の新しい職場で働いている筈の、今時っぽく言えば企業戦士をやっている筈の父も、きつと、空を。

（親不孝、つてのとは違うよな。巻き込まれちゃったんだし）

自分の体に浮かび上がった、痣のような模様を思う。

令呪。自らのサーヴァントへの絶対命令権にして、聖杯戦争の参加者であることを厳然と示す、聖杯から賜ったとされる黒色の翼紋。羽の数は一枚。枚数が多ければ多いほど優秀な魔術師であることを示すそうだから、どうやら自分は最下位らしい。

どう考えてみても分は悪い。  
何とかなめる、と考えるほうがどうかしている。

魔術のもたらす驚愕、英霊たちの振るう力の絶大を未だ目にしていないまでも、異は比較的冷静に認識していた。

自分の知らない世界。

神秘の、魔術を操る者たちが跋扈する世界。

この二晩でバーサーカーから聞かされたところでは、魔術師たちは生身ながらも警官隊なり軍隊なりとも渡り合える者もいて、こと英霊ともなれば戦闘機や戦車さえ破壊してみせるのだという。信じる信じない以前に、呆れるほどの化け物たちだ。

常識的に考えて、平凡な自分が相対してどうにかできる相手とは思えない。

訓練された警官や軍人なりが敵わないものを、この自分が？ 空手教室なんて半年で辞めてしまったし、せいぜい、幼少期のごっこ遊びの中でしか世界を救ったこともないような、高校二年生の男子が？

馬鹿げている。そう、理性が明確に告げているからこそ、異は笑う。

確かに、大いに馬鹿馬鹿しい。

昨晚聞いたバーサーカーの性質は、聖杯戦争という仕組みには如何にも不向きではあるし、そんな状態で六人六騎をすべて倒さなくてはいけない、と来る。

けれど、それでも。

「……逃げられないなら、やるしかないよな」

この瞬間。

來野異は覚悟を決めた。

本当の戦場を知る人間だとか、実際に魔術の世界を知る人間であれば、そんなものは覚悟でも何でも無い。ただ成り行きに身を任せたに過ぎない、と表現するだろう。異も、この覚悟なり決意なりはその手の類なのだろうとは思ってはいた。

それでも、だ。

異は、これが自分なりの回答だと確信する。

自分の街を守る。

巻き込まれた以上は、できる限りのことをする。

あとは、祖父よりも早くに亡くなった優しい祖母の言っていた通りに。

平静な気持ちを失わずに、やるべきことを見据えて。

「やろう、バーサーカー。俺は正義の味方じゃないかも知れないけど、でも、俺は、俺に笑いかけてくれる皆のいるこの東京を守りたい。聖杯戦争が東京を壊して、人を殺すっていうなら、俺は——それを止めたい」

ささやかに。



平凡に。

けれど、確かに自分なりの意思を込めて、異は目前の人ならぬ者へと告げていた。

「……ありがとう。ならば今ここに、僕の願いは果たされた」

「うん？」

「かつての生の中で、悪の狂気と誘惑へと墮ちてしまったが故に“反英雄”と化した我が身の心からの願いは、正義を果たすことに他ならない。

だから異。僕はおよそ、きみという少年によって召喚された瞬間から」

——聖杯への願いは。既に、果たされている。

そう言葉を述べてから。

夜空を背に、こちらへと向けて、手を。

三つの名を有する新しい友人が右手を伸ばしていた。

表情は、静かでありつつもやはり真剣。真摯。

「聖杯戦争を止め、東京を救う。きみの願いは聖杯によって叶えられるものではなく、自らの手で成すしかないものだ、マスター」

「やれることは全部やるさ。バレンティン前に気になる子が死んだりしたら、俺、死んで

も死にきれないぞ」

「<sup>あ</sup>敢えて軽く言つて、異も。右手を伸ばす。

それは――

星空の下での誓いだった。

正しくマスターとサーヴァントの間で交わされるものとは些<sup>二</sup>か違う。

――新たな友人同士の、決意と、覚悟の誓い。

単行本「Fate/Prototype 蒼銀のフラグメンツ」第3巻 ACT-3につづく

その時、蒼銀の騎士は

辿り着く先は

？

マスター・サーヴェントの

桜井光×中原によって描かれる  
原典「Fate」の前日譚スピンオフノベル！

# Fate Prototype

蒼銀のフラグメンツ

原作：TYPE-MOON 文：桜井光 イラスト：中原  
四六判／発行：株式会社 KADOKAWA /  
編集企画：コミック＆キャラクター局 コンプティーク編集部

©TYPE-MOON

聖杯戦争を翻弄する

極東の魔術師・沙条愛

少女となった全能

第1巻～第3巻 好評発売中！  
第4巻 2016年春発売予定！

第5部  
2016年春より  
月刊コンプティーク  
に連載開始予定！

2016年1月9日、発売予定!

迷宮の聖杯戦争

開幕!

# Fate/Labyrinth

フェイト ラビリンス

文：桜井光

イラスト：中原 原作：TYPE-MOON



伝説の迷宮で繰り広げられる  
「Fate」新作スピンオフノベル!

1991年、東京で起きた聖杯戦争を戦っていた沙条愛歌だったが、意圖が飛び魔窟で目覚めると探索者の少女・ノーマの身体に憑依していた。愛歌はそこで世界していたサーヴァント・セイバーと契約を結び、魔窟の奥へと進む。本年5月号～7月号に短期集中特別連載されたスピンオフノベルが、大幅書きおろしを加えて単行本化! 挿絵イラストは全点カラーで掲載! さらに、幻想世界を描く新鋭の作家・マガジロフ(「異自然世界の非常食」ほか)による、描きおろしイラストつきのモンスター図鑑も収録!



シナリオ イラスト  
桜井光&中原も参加!  
iOS/Android  
「Fate/  
Grand Order」  
好評配信中!

並製 四六版 / 312ページ / 定価：本体1300円+税  
発行 / 株式会社 KADOKAWA

KADOKAWA